



あたらしくはいった本 令和8年3月 貸出開始資料から

●**小説・エッセイなどの文学** 涯しない影に(赤川次郎/著) 微笑み迷子(新堂冬樹/著) DANGER(村山由佳/著) 夫を亡くして(門井慶喜/著) ノーウェア・ボーイズ(井上先斗/著) 言問ラプソディ(小野寺史宜/著) ゴルフ人生、泣いて、笑って(江上剛/著) 外の世界の話聞かせて(江國香織/著) こつこつ、オムレツ(太田忠司/著) 名前のないカフェ(ローベルト・ゼーターラー/著) ちょっと角の酒屋まで(角田光代/著)

●**その他の本** 白洲正子が愛した京都(白洲正子/ほか著) きくらげ幸せレシピ(春日井ファーム/著) 地面師vs.地面師(森功/著) 信号機本(小島俊平/ほか著) 気になる駅前アート100(イカロス出版) ICカードの中には何が?くらしの中のITがわかる本(大澤文孝/著) 卵 その誕生がすべてを変えた(ジュールズ・ハワード/著) いちご新聞Memories(サンリオ/監修) 人生を変える科学的な集中術(鈴木祐/著)



『涯しない影に』  
赤川次郎/著  
(KADOKAWA)



『微笑み迷子』  
新堂冬樹/著  
(実業之日本社)



『白洲正子が愛した京都』  
白洲正子/ほか著  
(新潮社刊)

**5月 としょかんカレンダー**

日	月	火	水	木	金	土
						1 2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

○印の日は、お休みです。

いま太宰府天満宮では、令和9(2027)年の式年大祭に向けて、社殿の改修・葺き替え工事が進められています。そこで今回は、天満宮の社殿造営について、中世の事例を取り上げてみたいと思います。ただ、中世の天満宮造営に関する史料は断片的にしか残っていないので、その中でも比較的多く残っている戦国時代の一事例をご紹介します。

戦国時代の初期にあたる文亀2(1502)年の11月、筑前国を治める大内義興は天満宮に対し、早良郡(現福岡市早良区・城南区周辺)内にある天満宮の領地に半済を実施するのを免除しました。半済とは年貢の半分または土地の半分を一時的に領主から取り上げて、必要な費用を捻出する施策です(本紙1月号に詳述)。大内氏は同郡にある支城の安楽平城(現早良区内野付近)に在番する家臣たちに扶持を与えるために、郡中の寺社領に一律に半済を行って費用を確保しようとしたのです。

これに対し天満宮は大内氏に訴えて、当宮は昔から臨時の諸税・負担

太宰府の文華と公文書館だより 145

を免除されていますと、証拠書類を提示して主張しました。また、いまは造営の最中であり、これで作業が止まったら、神官・社僧たちの悲しみは甚大です、とも述べています。

ここで当時、天満宮では造営が行われていたことが判明します。しかし、具体的な様子については何も記録されていません。なお一部の史料には「造営」ではなく「修造」と記されているので、全くの新築や立て直しというより、修理というべき実状だったのかもしれない。

その3年前の明応8(1499)年6月、太宰府天満宮が炎上したとの知らせが京都に伝わっています。前年の同7(1498)年には天満宮の大鳥居が焼けたという記事もあります。後世の編纂資料によると、同年の11月22日に、少弐氏の残党と大内氏との戦争の兵火にかかり、天満宮が延焼したとされています。恐らくこの火災が、造営の直接の契機だったのでしよう。それでは造営はいつ完成したのか、実ははっきりせず、その後も造営について触れた史料が点々と残されています。

太宰府市公文書館 大塚 俊司